

連載 第4回 看護師とのタイアップ**看護師の就労者数**

「令和4年版厚生労働白書」によると、医療・福祉分野の就業者数（事務職を含む）は2021年時点で891万人となっており、日本全体の就業者の約8人に1人が医療・福祉分野で働いている計算になります。

その中でも医療関連の厚生労働省所管国家資格就労者は、コロナ禍前の2019年で、看護師が127万2,024人（構成比率：41.5%）となっており、医師33万7,625人（同11.0%）、薬剤師31万158人（同10.1%）、臨床工学技士3万409人（同1.0%）などと比べると桁違いに多く、病院内で一番の大所帯となっていることが一般的です。

看護師の強み

前述のとおり、病院組織最大の部門に所属している看護師について、私が抱いている印象（あくまでも個人的な意見）は、次のとおりです。

- ①明るく、コミュニケーション能力が高い。
- ②注意力・観察力に長けており、判断から行動までが迅速。
- ③向上心が高く、学びに貪欲である。

具体的には、院内外の研修等に積極的に参加し知識を常にアップデートしている、職員アンケートを実施しても回答率が高いなど、何事にも前向きかつ協力的と感じる

場面に多く接してきました。これだけポジティブな要素が多く、院内でのネットワークも広い看護師とタイアップできれば、多職種協働による改善活動を成功に導き、その強みを発揮してくれることは間違いありません。

看護師の特性を生かした事例

ある病院の看護部とSPDとのコラボ事例を一つご紹介します。

この病院では約10年前にSPD外部委託をスタートさせ、院内物流の効率化を図ってきましたが、ここ数年はコロナ禍もあり看護部との関係性が薄れてしまい、定数変更や物品切替など、ルーチン業務範囲の情報共有しかできていない状況が続いていました。しかし、昨年度看護部長が代わったタイミングで再び接点ができ、定期的に情報交換や改善を提案する場として定例会を実施することになったのです。

定例会の目的は、看護部から現場の率直な意見や要望などを出してもらい、SPDからは物流にかかわるデータ（不動在庫、同種品切替等）を基にした情報提供などを行い、相互の生きた意見を持ち寄って業務改善を推進していくことです。さらにSPDの日次業務で困っていることや運用の見直し提案などは、看護部長や手術室師長に直接確認して解決を図ることが可能となり、さ

まざまな問題解決につながる貴重な場として機能し始めています。

しかし、驚くべきはその解決のスピードです。

議題の一つとして期限切れになりそうな診療材料の相談をしたところ、すぐに関係部署に連絡し状況を把握して、即座に期限切迫品を使用してくれる部署を探し出し、破棄ロスをその場で回避しました。

また、手術キットの切替提案についても、年間改善効果（約50万円）を示したところ、医師へのアプローチ方法を協議しつつ、サンプリング日程を迅速に決定するなど、看護部長の意思決定や的確な指示、その指示を部署へ伝える副看護部長の手際の良さは、いずれも舌を巻くものでした。

病院を動かすのは看護師

本来であれば、経営の中核を担う事務部門が主導してコスト改善活動を推進するのが理想ではありますが、事務部門の体制や担当者のスキル・マインド等により具体的な活動に進められるかどうかという課題があります。そこで、提案したいのが「看護師とタイアップした改善活動」の推進です。

前述の事例でもお伝えしましたが、看護師ほどさまざまな立場の方々と上手くコミュニケーションが取れる職種はいませんし、職員全体のうち大きな割合を占める看護部門が主体的に動くことで、組織としての目的に向けて動ける状況を率先して作れるようになります。

また、看護師は仕事の性質上、テキパキと段取りが良く、物事をきっちりと明確にする方が多い印象なので、業務改善のリーダーとしても適任だと思います。

前回「医師を動かす」でお伝えしましたが、診療材料のコスト削減における医師の関与は極めて重要です。しかしながら、医師の協力を引き出すのは簡単ではありません。そこで、一つのアイデアですが、思い切って、看護部門からコスト改善の専任担当者（主任クラス）を1人選出し、医師との面談や事業者との交渉にも加わっていただく役割を担っていただくというのはいかがでしょうか？

1年ごとのローテーションで看護の現場に戻ってもらえば、診療現場のコスト改善意識も飛躍的に向上することが期待できますし、購買を担当する事務職員のマインドにも好影響を与えてくれると思います。